



養正十三年
 三篇
 下



特別
 ~13
 4203
 9



風月花情 春告鳥卷之九

江戸

金龍火狂訓亭

為永春水著

新

第十七章



梅里ハ婢女の言の葉草も此暮多ぬ他亦頼感ト全
顔をまらると音く ありまむがまぬやぐのを姉
中えのねまぐドレお骨をトひらぐう蒲焼の蓋をさるる直徳の
方の美徳形をまづ二三本小皿入るるにけこまへる姉の
穂とトまらぐらお徳の茶おまはす二三杯三杯とらぐ小皿のれ

昭和庚午四月三日
神保五彌氏贈寄

58 2845



きんこまをきりくのみ

天保六年の九月もあつた
 大坂のこまをきりくのみ
 作者

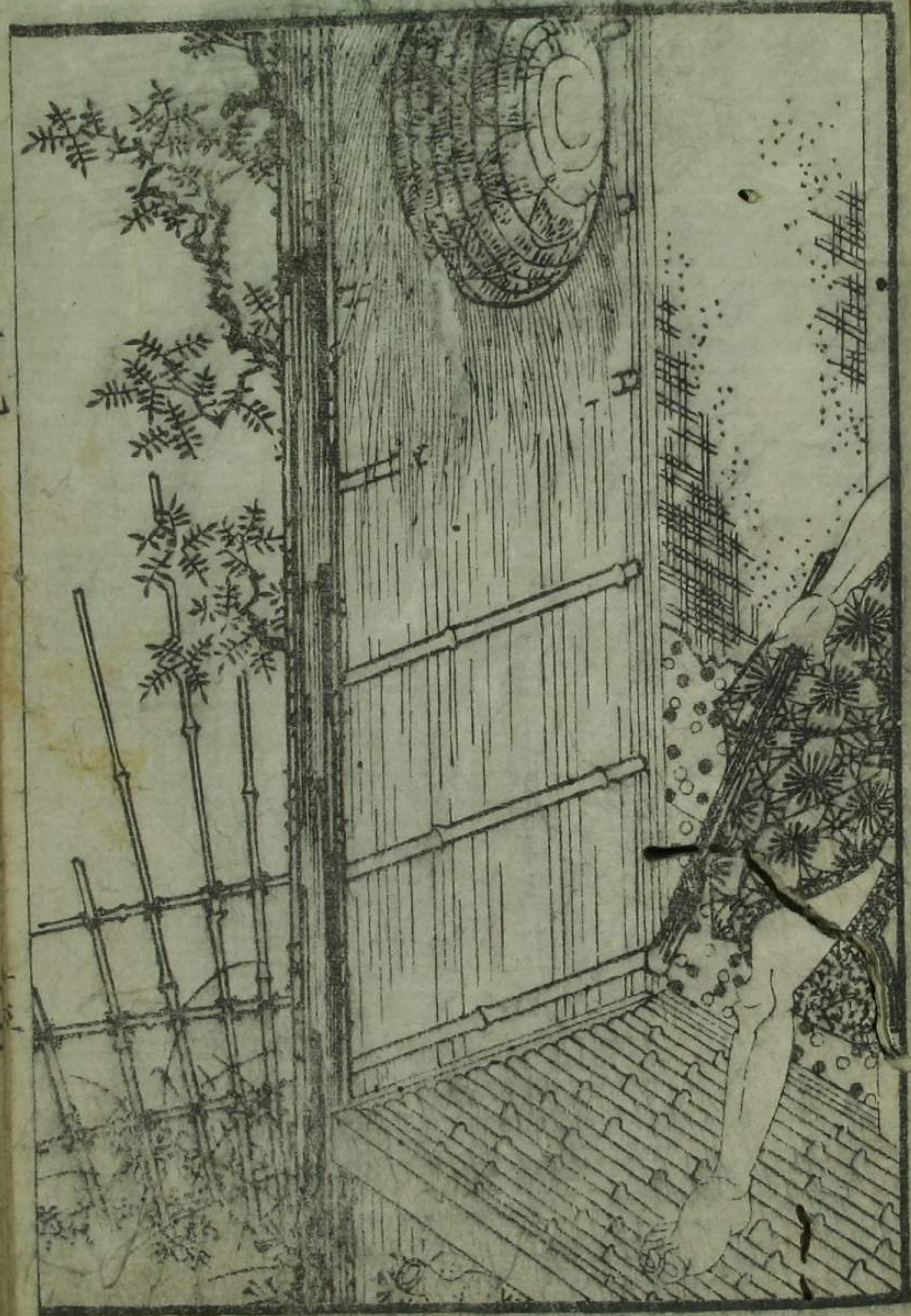
たけなす 告九

座後へ来てく歩居

作者曰在尾結金の男へ射せしお懸が返るのゆも朋後月
意友しる物米もさひまじま止たるもいかにいふ
意智をさくぬ用らの灯し見入らう如かゆめつら光列
多ほびの人形をうれしづらうゆめはらる風物
いかに懸るもいかに懸るもいかに懸るもいかに懸るも
たるう小遠のくさやんとせしきあさるとあまのい
坐業輝るるさや看宮よりくさくさくさくさく

第十八章

いふお懸が射とるし一お懸が返るあは民とりの一帯に居る
懸るし一の身難ハ兄の章及弟小懸る上の方の者入世
らば一が東のいかに懸るもいかに懸るもいかに懸るも
懸るの懸るもあつし一く牙しはくも氏のいかに懸るも
後さあつらうとく懸るとあは後いかに懸るもいかに懸るも
まへ軒簡さのさへあつし紙を下し一の率その月の夜
帰るまを懸るもいかに懸るもいかに懸るも一居る懸るもいかに懸るも



九
出
名

十四

内よりハット中のひより喜のうへにキーけきとていふこと
時た能を内より押服とていふこと男堂の中にもいふこと
且も種々いふこと形勢を見るよりとも男難はひら
覺るべくても選まぬはあつこと思ふべくもいふこと
彼の助命をたのまんと思ふはけいごと一生懸命 可く
く下へけいごといふこと大書にふて目覚めたりいふこと
免るべくもいふこと身の上の本意の思ふこと二階の
春の中をて冷汗を流しとて賢將此意とていふこと

は時より身難はひらよとて糸の方をきりていふこと
お民にやうとていふこと初編の意をいふこと
お渡のことろの意をいふこと
情を分る意をいふこと
次を委しく分解毒の意をいふこと
よあしく高寛を預めといふこと
友人使者をいふこと
春水日といふこと

春鳥告巻之九

花情花情 春告鳥卷之九了

草紙のついでに人傳の地をあらわすにあらはれしを
相傳に極言の如く今の世禁のゆるぬ場を
くまらぬとてさるるにけりとも在けんとも
さるるのふと一六画組と目前の同くさるるを
ゆるるるに
新
狂訓亭

あやかし
あやかし

